

第V章 考察

1 屋 瓦

A 軒瓦の組み合せ

平城宮跡で出土した瓦のうち軒瓦の総個体数は、1975年現在で24,000点をこえており、軒丸

平城宮の代表的な軒瓦

- * 瓦・軒平瓦のそれぞれに100以上以上の型式がみとめられている。これらの軒瓦諸型式は、すべてが一様にみられるのではなく、十数型式のみが集中的に多量に出土している。宮内の地域によって、瓦の出土量には多寡があり、また出土する軒瓦型式に差異のあることも知られている。さらに、特定の軒丸瓦型式・軒平瓦型式が一組として製作・使用されたことも判明している。

主な組み合せ10組のうち宮内のほとんど全調査地域に広くみられ、かつ出土量も多いのは、

- * 6311A・B—6664D・F, 6225—6663, 6282—6721であって、平城宮の造営・改修に際してこの3組が最も多くもちいられた瓦ということができる。ところで宮内における軒瓦の組み合せのありかた(Tab. 22)を比較するとき、今回報告する内裏北外郭地域において最も数多くみいだした6311A・B—6664D・Fが、内裏地域においても多数を占め、ともに高い比率をしめていることが注目される。つぎに多いのは、6313・6314—6666・6685の組である。内裏内郭地

主要軒瓦は内裏と共に

- * 域では6314をみないが、6313が6666・6685の両者と組みあっており、個体数・比率とともにやはり6311—6664の組について第2位をしめしている。内裏北外郭地域出土瓦の第3位を占めるのは、6225—6663の組である。この組みは、内裏地域においては出土瓦の1割未満で、第4位となっているが、いっぽう内裏地域で第3位を占める6282—6721の組みが、内裏北外郭地域では第4位となっている。以上かげた4組の軒瓦のうち、6311—6664, 6313・(6314)—6666・6685の2組が、内裏北外郭・内裏の両地域に共通して軒瓦のなかでともに第1・2位を占め、かつそれぞれ全体の50%という多数を擁する事実は重要である。それは両地域の建物が同一の造営計画にもとづき、同時もしくは時を接して造営された可能性をしめすからであり、かつまた、北外郭の性格が内裏と密接なものだったことを想定させるからである。

ここで、内裏東外郭地域、および大膳職地域における軒瓦型式の比率と比較してみよう。

- * まず、内裏東外郭地域においては、6311—6664が最も多く、6225—6663の組みが2位を占める。この両者にくらべるとずっと少ないが、第3・4位は、6313・6314—6666・6685, 6282—6721の2組である。内裏北外郭・東外郭両地域の軒瓦とくらべると、第2・3位の順がいかわってはいるが、似た構成ということができ、造営期が同時であった可能性を考えさせる。

造営期が同時の可能性

つぎに、大膳職地域の軒瓦で第1～3位を占めるのは、6282—6721, 6133—6732, 6284—

- * 6664の組であって、今回報告する内裏北外郭の軒瓦の構成とは異っている。これは、両地域の建物群が性格を異にし、かつ造営年代がちがっていたことによるものであろう。

B 軒瓦の製作年代

軒瓦年代
観の修正

平城宮においては、内裏・朝堂院がまず中央に（第1次）、のちに東寄りに（第2次）いとなまれたことをさきに推定し、「第2次内裏」造営の時期としては、聖武天皇が還都した天平末年以降の可能性が大きいと考え、6311A・B—6664D・F、6313・(6314)—6666・6685に、天平末年の年代をあたえた。しかし先述したように、今回、この2組の軒瓦は、SK2102における*出土状況から、確実には神亀末年にまで、おそらく養老ころまでさかのぼることが明らかになり、したがって、第2次内裏の造営年代は下っても天平元年までであると考えるにいたった。SK2102から出土した木簡には、造営関係の記載をもつものが多い。上記2組の軒瓦は、内裏の造営とあい前後して、内裏北外郭が最も整備された時期に使用されたものであろう。

藤原宮式瓦

ここで、平城宮の軒瓦のうち、主要なものについて、現状における年代をかかげておこう。*
6273・6281—6641・6643をはじめとする藤原宮式の軒瓦は、平城宮においては、藤原宮における組み合せそのままでなく、対応関係もくずれて用いられている。しかし、朱雀門・宮城西南隅付近で出土した軒瓦のなかで、藤原宮式の占める割合が大きい事実は、和銅年間、平城宮の最初の造営にあたって使用したことしめすものであろう。

興福寺式瓦

6301—6671は、興福寺創建（和銅初年）に際してもちいた組み合せである。しかし、平城宮*で出土するのは6301B・Cであって興福寺で使用した6301Aそのものは出土していない。型式学的にみて、6301B・Cは、6301Aと近接した時期を想定させ、造興福寺仏殿司（養老4年設置）との関連で養老年間にさかのぼるものと考える。6284C—6664Cの組み合せも、また和銅の瓦と考えられる。6664の14種には、中心飾りの花頭の形状にi~ii iのヴァラエティがあることを先に述べた（Fig.28）。6664Cの花頭はこのうちiにぞくし、茎部上端は左右にひらき、かつ*内区・上外区とを画する界線に接していない点で、均整唐草文をもつ最古の軒平瓦、すなわち

宮城西方 朱雀門 第1次朝 壁面地盤 内裏地域 大膳職 内裏北 第2次 内裏 東 第2次朝 塔積基 造酒司 東院地域												
官衙地域 宮西南隅 堂院地域 内裏地域 地域 外部地域 内裏地域 外部地域 堂院地域 塔積物 地域 東院地域												
I期	6273 6281 6641 6643						6284A～C 6301A～B 6301A～C 6664D～F					
							6225 6663 6683 6688 6012 6572					
II期	6301B・C 6671B・C						6313A～D 6314A～D					
III期							6133A～D 6732A～C					
IV期							6282 6282 6721 A・C～H					
							6151 6760					
							天平17 745 天平勝宝 749～756 天平宝字 757 767～769 神護景雲					

Tab. 21 平城宮主要軒瓦の編年

*はその組の軒瓦がその地域の出土軒瓦のうち数量的にそう多くないもの

『平城宮報告Ⅲ』 p. 67。

2) 『平城宮報告Ⅵ』 p. 140。この問題にかんしては、森 郁夫「平城京における宮の瓦と寺の瓦」『古代研究』第8号1976年 pp. 3 を参照。

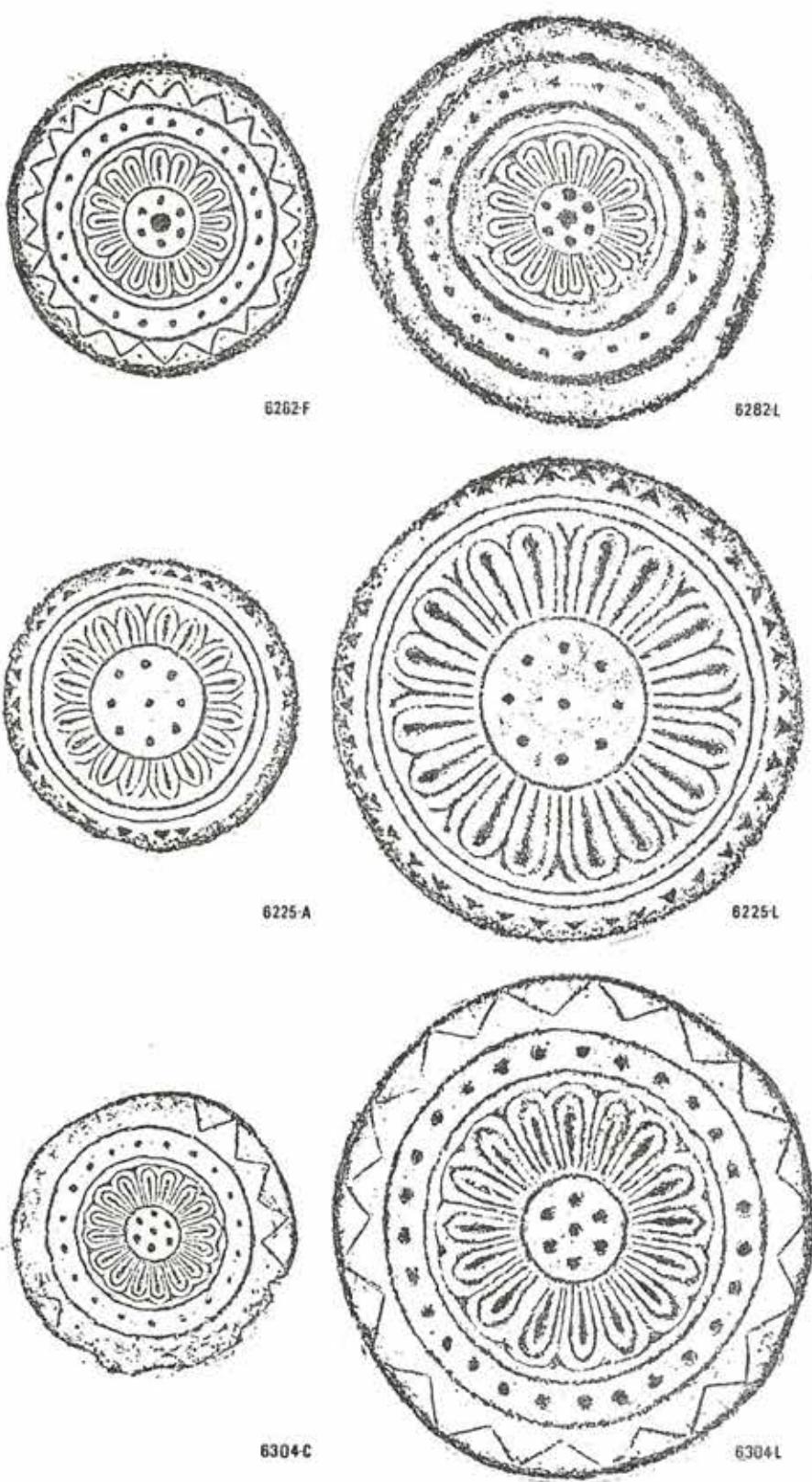


Fig. 48 普通の軒丸瓦と大型軒丸瓦 縮尺 1/4

6661(大官大寺式)のそれに直結し、iii、すなわち基部が平行2直線からなり、茎部上端が上の界線に接しているもの(6664D・F)に、型式学的に先行している。6284C—6664Cは、6A

BE区SD3765下層で、和銅の年紀木簡、および平城宮Iの土器と伴出している。6311A・B—6664D・F、6313・6314—6666・6685の年代が、おそらく天平初年にさかのぼると考えるにいたったことは先述のとおりである。6308に対応する軒平瓦は未解決であるが、6685と同文様の6682が奈良山52号窯で6308Dと伴出したことから、上記2組と近い年代を考えておきたい。

朝堂院の瓦 6225—6663は、朝堂院の造営にもちいた組み合せであって、やはり天平初年にまでさかのぼる可能性が大きくなつた。6282(A種をのぞく)—6721の組は、今回、6721がSK820から出土したことによって、天平末年に存在していたことが明らかになった。^{*}

6012—6572は、唐招提寺講堂の解体修理にともなう地下遺構の調査(奈良県教育委員会1972年)によつて、講堂創立前の建物遺構(新田部親王<天平7年=735年没>の旧宅と推定される)に伴うことがあきらかとなり、平城宮東朝集殿の移建(天平宝字3年=759年)に先だつことが判明した^{*}が、ひきつづいてやはり唐招提寺講堂地下で、天平15年の紀年木簡と伴出したことによつて、

重圈文軒瓦の年代 年代はさらに天平年間にさかのぼることが確実となった。このようにして、6012—6572を重圈文瓦の組みとして、最も古くにさかのぼるものと考える。なお、難波宮の軒瓦の研究では、6015—6572がこれに先行するものと考え、それに神龜3～天平6年の年代をあたえている。

6133—6732の製作年代については、西大寺・東大寺の類例によつて推定できる。西大寺西塔跡の発掘調査によつて、6732Hがおそらく宝龜にさかのぼることはわかっていた。しかし、

東大寺西塔跡の軒平瓦 東大寺西塔跡の調査(奈良県教育委員会、1965年)によつて、6732G・Hをその建立年代、すなわち、天平勝宝5年に使用したことが確実視できるようになった。平城宮出土6732A～Dの年代も天平勝宝年間におくことが可能である。

C 大型・小型軒丸瓦の用途

*

今回報告する軒丸瓦には、6225L、6304Lのように、径がふつうの軒丸瓦の倍に近い、ひじょうに大きなものがある。平城宮には、このほかにも、6282L、6308L、6133Lのように同様に大型の軒丸瓦がある。この種の大型軒丸瓦に共通する特徴は、出土量がすくないこと、これに対応する大型軒平瓦がないことである。6225Lについては、先述したように、丸瓦部がふつうの大きさの丸瓦からなっていることを確認している。この大型軒丸瓦は、ふつうの軒先・蟻^{ヒルガ}羽にもちいたとは考えられない。東朝集殿跡の調査では、多数の6225Aとともに6225Lが8個出土しており、東朝集殿の模型製作の際には、大棟飾りが鷲尾ではなく鬼瓦と仮定して6225L⁶⁾を大棟に2個、降り棟に4個、そして拝みの部分と軒隅とを含めて計12個の使用を想定した。

6313・6314・6666・6685のような小型軒瓦の用途については、さきに、檜皮葺き屋根の棟瓦か築地の屋根瓦の可能性をあげた。しかし、6311—6664など一般的な大きさの軒瓦には、これに対応するふつうの丸瓦・平瓦が多量に存在する反面、小型軒瓦に対応すべき小型丸・平瓦は、ほとんど存在しない。したがつて、棟瓦と考えるのが妥当であろう(別表4解説参照)。

3) 奈良県教育委員会『国宝唐招提寺構堂他二棟修理工事報告書』1972年, p.62。

廊修理工事報告書』1961年, p.47。奈良県教育委員会『東大寺西塔院の緊急調査』奈良県文化財調査報告書8, 1965年, p.20。

4) 中尾芳治「重圈文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」『難波宮研究調査年報』1971年。

6) 細見啓三「平城宮東朝集殿の復原模型」『年報1970』, p.47。

5) 奈良県教育委員会『重要文化財東大寺中門廻